

第86回関西スペイン語教授法ワークショップ 実施報告

実施日：2015年3月7日（土）

場所：関西学院梅田キャンパス・ハブスクエア 1401 教室

出席者：川口正通、柳田玲奈、各務恭子、鈴木真由美、横山友里、小川雅美

テーマ：「第6回関西スペイン語教師の集い（第86回関西スペイン語教授法ワークショップ）」のふりかえりと
2015年度の活動方針について

報告内容：出席者が少人数であったが、その分忌憚なき意見交換ができた。ごく簡単ではあるが、以下、報告する。

- 1) 「教師の集い」については、Taller 1 と Taller3 について話し合った。（「第6回教師の集い」の議事録はTADESKA ホームページを参照のこと。ただし、現時点において、4つめのワークショップの報告は未掲載。）

Taller 1 「なぜスペイン語を学ぶのか？英語以外の外国語を学ぶ意義について考える」について

- ・興味深いテーマであった。

- ・アンケートの中に、大学卒業後、スペイン語を使う機会がなく、学び続けていない人が多かったが、全員が「スペイン語を学んだことについて満足している」という結果が示されていた。これは喜ばしいことである。ただし、アンケートの回答者が、大学でスペイン語を専攻した人々であったことを考えると、この結果を、教養としての第2外国語のスペイン語学習者にも言えるとは限らないことに留意すべきだろう。

- ・第2外国語（英語以外）を中等教育で必修にすべきであるという議論もあったが、そのことは、大学設置基準の大綱化により大学から第2外国語クラスが減って行ったことと関連づけられていたような印象があった。しかし、それであれば、第2外国語教育を中等教育に新設するのではなく、大学の第2外国語を大綱化以前に戻る働きかけをしてもよいのではないか。（←おそらくそうはできない事情があるのかもしれないが、もっと議論を深める必要があるだろう。）

Taller 3 「高校でのスペイン語教育の今、そして大学につなげるために」

- ・「集い」の中の議論で、高校のスペイン語教育の状況が、関東と関西でかなり異なるという事実が見え、興味深かった。

- ・「高大連携」という言葉から想像する意味内容が、人によって異なるような印象を受けたが、そもそも、「高大連携」とはどういう内容を指すものとして、セミナーなどで話し合われているのか、という質問が出た。これに対して、出席者であり Taller 3 の担当者だった各務さんから、「実は、『高大連携』が具体的にどういうことを指すのかについて、統一した見解があるわけではなく、セミナーや講演会では、発表者が自分が思うところの「高大連携」について述べている、とのことであった。つまり、高校と大学がそれぞれ行っていた活動の間に接点を設ける、という緩い連携もありうるし、スペイン語ならばスペイン語のカリキュラムを、たとえば中学から高校校にかけての英語教育のように高大で一貫させる、という意味の強い連携もありうる。少なくとも、互いが無関心でいる状況を打開する、ということとは共通して言える。各務さんにとっては、高校教師の各務さん自身が TADESKA に参加して大学の教師と話し合うことで得られたことをもって、高大連携であるとのことだった。各務さんが力を込めて言っていたのは、「せっかく高校で楽しくスペイン語を学んで、大学でも取りたいという意志表示をする生徒がいても、どの大学ならスペイン語を学べるかという情報が少ないので、そこをもっと知りたい。」ということであった。

2) 2015 年度の活動方針について

・「教師の集い」の最後に決めた通り、2015 年度は、日本のスペイン語教育の制度的な状況について参加者同士で見て行くとともに、アカデミアの『新文法（基礎編）』を 1 節ずつ講読することにした。さしあたり、この日の出席者で、いくつかの担当月を決めた。残りは、メールなどで募りたい。

（報告者：小川雅美）